



グローバル・パートナーシップを推進するための

人材育成およびプログラム開発

- 広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター設立に向けて -

(2007 - 2008)

米日財団奨学寄付金事業成果報告書

平成20年1月

広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター

代表者 小原友行(広島大学大学院教育学研究科)

目 次

センターの目的と組織	
1. センターの目的	1
2. センターの組織	1
本年度事業報告	
1. 体験型海外教育実地研究	2
2. 第3回学校間交流国際フォーラムの開催	18
3. 講演会の開催	20
4. ゲスト・ティーチャーの招聘	20
5. ワークショップの開催	21
6. 生徒相互訪問交流事業の支援	21
7. 学校間交流事業の支援	22
8. エスコート・プログラムの支援	22
9. コンソーシアム	23
10. 米国ボストン市でのGPSC活動の紹介	24
11. GPSC100名ネットワークの構築	24
12. ウェブページの更新	24
本年度事業に対する評価	
1. 第2回学校間交流国際フォーラムの参加者アンケート	25
2. 体験型海外教育実地研究についての評価	25
3年間の事業に対する評価	
1. GPSC 外部評価者による本年度事業に対する評価	26
2. 3年間の事業の成果と課題	26
補助資料 本年度会計報告	28

センターの目的と組織

1. センターの目的

本センターの目的は、多様な国際交流・国際協力の活動を展開することを通して、日米両国の教員・学生・児童生徒の相互理解と協力を促進することである。そのために、具体的には次の目標の実現を目指す。

情報発信：センターのWeb ページを開設し、過去のプロジェクトの研究成果（日本語・英語）開発した教材や資料、GPSC に関する情報、広島や平和に関する資料紹介などの情報を発信する。

人材育成：リーダー養成のためのワークショップの開催、小中高教員の相互訪問、児童生徒の相互交流（実体験型・バーチャル体験型）教員志望の学生・大学院生等（現職教員を含む）の相互体験型海外教育実地研究の支援などの国際交流活動を通して、グローバル・パートナーシップを推進する人材を育成する。

プログラム開発：日米両国の教員による共同研究やワークショップを通して、グローバル教材や学習指導法の開発・実践・検証、姉妹校関係の締結・継続の方法論の開発などを行う。

2. センターの組織

2007 年度の組織の概要は次のとおりである。

センター長：小原友行（広島大学大学院教育学研究科教授）

研究員：深澤清治（広島大学大学院教育学研究科教授、人材育成担当）

朝倉 淳（広島大学大学院教育学研究科助教授、プログラム開発担当）

神山貴弥（広島大学大学院教育学研究科助教授、情報発信担当）

研究協力者：大松恭宏（広島大学附属東雲小学校副校長）

須本良夫（広島大学附属東雲小学校教諭）

神原一之（広島大学附属東雲中学校教諭）

鹿江宏明（広島大学附属東雲中学校教諭）

石井信孝（広島大学附属三原小学校教諭）

石原直久（広島大学附属三原小学校教諭）

木本一成（広島大学附属三原中学校教諭）

松尾砂織（広島大学附属三原中学校教諭）

海外研究協力者：キャロリン・レッドフォード（イーストカロライナ大学）

ベティ・ピール（イーストカロライナ大学）

アンナ・リオン（イーストカロライナ大学）

研究アドバイザー：米川英樹（大阪教育大学留学生センター長）

二宮 皓（広島大学理事・副学長（研究担当））

石井眞治（広島大学大学院教育学研究科教授）

評価者：溝上 泰（前広島大学監事、元鳴門教育大学長）

坂越正樹（広島大学大学院教育学研究科長）

マリリン・シーラー（イーストカロライナ大学副学長）

. 本年度事業報告

1. 体験型海外教育実地研究

グローバル・パートナーシップの樹立に必要な知識・能力を備えた人材を育成する事業の一環として、昨年度より広島大学大学院教育学研究科博士課程前期の授業として「体験型海外教育実地研究」を開設した。本授業は、事前研究と事後研究ならびに 10 日間の現地での教育実地研究からなるプログラムである。本年度のプログラムの詳細ならびに参加者の報告をまとめたものを次ページ以降に示した。

大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究報告

小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥・岩城宇紀*・中井俊之*・森俊郎*・浅野博子*・
大村正樹*・庄野修一*・矢野和佳子*・鷲見勝司*・吉浪徳香*・小野智子*・榎並愛子**
(2007年12月3日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary/Secondary Schools in the United States (II)

Tomoyuki KOBARA, Seiji FUKAZAWA, Atsushi ASAKURA, Takaya KOHYAMA, Takanori IWAKI,
Toshiyuki NAKAI, Toshiro MORI, Hiroko ASANO, Masaki Omura, Shuichi SHONO, Wakako YANO,
Katsushi SUMI, Norika YOSHINAMI, Tomoko ONO, and Aiko ENAMI

Abstract: This is a second year's report on overseas teaching practicum by Japanese graduate students in elementary/secondary schools in the United States in September 2007. It awaits no discussion that future teachers need to develop enhanced awareness and skills in teaching young global citizens in the future. For this purpose, Global Partnership School Center, Hiroshima University, conducted a second-year overseas teaching practicum by education-major graduate students in the United States. Reviewing the teaching practices and the participants' self reports, it was found that this innovative opportunity helped them raise their cross-cultural awareness and gain confidence in teaching.

1. はじめに

本論は、昨年度(小原ら, 2007)に引き続いて行った, 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期学生および現職小・中学校教員によるアメリカ合衆国ノースカロライナ州の公立小・中学校における「体験型海外教育実地研究」の第2報である。

「体験型海外教育実地研究」のプログラムは, 米日財団の助成を受けて2005(平成17)年4月に設立した広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター(略称はGPSC)によって企画・運営されたもので, 広島大学大学院教育学研究科とノースカロライナ州グリーンビル市にあるイーストカロライナ大学教育学部との間の長期にわたる国際交流を通して培われた信頼のネットワークを土台として可能になったものである。またそれは, 広島大学でのアメリカの小・中学生に日米の文化の相互理解を図るための教材研究, アメリカ合衆国の小・中学校での授業観察および英語による授業実践, 帰国後の事後研究による教

材の完成とレポート作成という, 国際交流型およびアクションリサーチ型のユニークな教育実習の取り組みである。

本プログラムの最大のねらいは, 将来教員を目指している大学院生や現職派遣の大学院生, そして現職教員の希望者に対して「体験型海外教育実地研究」を行い, それを通して彼らにこれからの時代の教員に求められるグローバルな資質や能力を育成するとともに, 異文化間コミュニケーションを重視した高度な実践的指導力を養成することである。以下では本年度の本プログラムの概要, 参加者それぞれの学習成果と自己変容, そしてプログラムの評価(授業について, アンケート結果から)について紹介していきたい。

2. 体験型海外教育実地研究プログラムの概要

本プログラムの計画および訪問校, 参加者は以下の通りであった。

1) 期間 平成19年4月~12月

*広島大学大学院教育学研究科博士課程前期大学院生, **東広島市立三ツ城小学校

- 2) 訪問先 米国ノースカロライナ州内の小学校及びニューヨーク市
- 3) 訪問目的 広島大学大学院教育学研究科授業科目「体験型海外教育実地研究」の実施及び学校間国際交流の推進
- 4) スケジュール
- 4/11(火) 履修等, 説明会
- 5/31 (木) オリエンテーション
- 6/8(金) 講演会「米国における初等教育教員養成と小学校教育事情」
- 6/9(土) GPSC 第3回学校間国際交流フォーラム(広島ガーデンパレス)
- 7/5(木) 第1回事前研究 個別研究テーマ(授業実践研究)の設定・日本文化の紹介について内容と方法の打ち合わせ
- 8/2(木) 第2回事前研究 個別研究テーマ(授業実践研究)の交流と協議・日本文化の紹介について内容と方法の打ち合わせ
- 8/30(木) 第3回事前研究 個別研究テーマ(授業実践研究)の交流と協議
- 9/11(火) 第4回事前研究 旅程確認・諸準備・日本文化の紹介について内容と方法の打ち合わせ
- 9/15(土) 広島発・経由地・グリーンビル着
- 9/16(日) 事前打ち合せと準備
- 9/17(月) 各校での実習(授業実践研究)
- 9/18(火) 各校での(授業実践研究)
- 9/19(水) 午前 ローリーへ移動
午後 デューク大学訪問
- 9/20(木) Exploris Middle School での実習(日本文化の紹介)

- 9/21(金) 午前 ニューヨークへ移動
午後 海外教育実地研究(フィールドリサーチ)
- 9/22(土) 終日 海外教育実地研究(フィールドリサーチ)
- 9/23(日) ニューヨーク発
- 9/24(月) 成田経由・広島着
- 11/1 (金) 事後研究1 成果報告会
- 12/11(火) 事後研究2 成果報告会
- 5) 参加者およびグリーンビルにおける配置校
- Elmhurst Elementary School
Ms. Suzanne Hachmeister(パートナー校教員)・神山貴弥(引率教員)・中井俊之・森俊郎・浅野博子・榎並愛子
- Wahl Coates Elementary School
Ms. Cynthia Watson(パートナー校教員)・深澤清治(引率教員)・庄野修一・矢野和佳子・鷲見勝司
- G. R. Whitfield School
Ms. Pam Justesen (パートナー校教員)・朝倉淳(引率教員)・大村正樹・吉浪徳香・小野智子

3. 参加者の報告

参加者は、現地配置校において、それぞれ事前研修を通して準備した授業を実践した。以下には各参加者が著したこの授業に関する「ねらい」「概要」「成果と課題」、およびこの海外教育実地研究を通してもたらされた「自己変容」についての報告を掲載した。



写真1 参加者による授業実践の様子



写真2 参加者による日本文化の紹介の様子

1. ねらい

本授業のねらいは、折り紙で紙飛行機を作ることを通して、一枚の紙が持つ多様な可能性を知り、日本の文化に興味を持ってもらうことである。今回の授業を考えるにあたり、アメリカには紙を丁寧に折ると言う習慣がないため比較的製作時間が短いこと、興味を持ちやすいようにユニークな形(リング型)であること、全員が完成でき飛ばすことができるように単純な構造にすることを考慮した。

2. 概要

はじめに、授業で取り扱う紙飛行機を提示し、それが何であるかを少し考えさせた。一般的な紙飛行機とは形状が異なっているので、子どもたちは実際に飛行機が飛ぶ様子を見せるとかなり興奮した様子で興味を持っていた。

次に、子どもたちに紙を1人一枚配り、製作に移った。製作の際に、教室前の黒板に製作工程を子どもたちが使う紙と同様のもので一段階ずつ示した模造紙を提示し、さらに子どもたちの紙のサイズの10倍程度の大きさの教師用の紙を用意し、全体に作り方を示すための見本となるようにした。模造紙で工程一つずつ説明し、大きな見本を持って全体を回りながら、できていない子どもの補助を行った。製作工程を一段階ごとに全員ができたかを確認し、次の工程へと移った。

全員が完成した後、教室の外に出て飛行機を飛ばした。最後にまた教室に戻り、その他の紙飛行機(スペースシャトル型、竹とんぼ型など)と示し、すべてがどこにでもある紙一枚で作ることができること、紙の持っている可能性には限りがないことを伝えて授業を締めくくった。

3. 成果と課題

アメリカでは折り紙という文化がないため、日本の幼稚園児くらいであっても作れるくらいの単純な構造の飛行機を取り上げたが、製作工程を示すための英語の説明が細かく、小学生に言葉で伝えるのは苦戦した。日本語の「折る」という行為が英語の“fold”という言葉だけでは上手く通じず、角と角を合わせて丁寧に折るというニュアンスが伝わらなかった。折り方を教えるというより、「折ってあげた」という場面も多々あった。もう少し、わかりやすい説明を示すことができればよかったと感じている。授業後に知ったことだが、訪問先のノースカロライナ州はライト兄弟が初めて有人動力飛行を成功させた地でもあり、街中を走る車のナンバープレートには“First Flight”の文字が記されているほどである。その点を紙飛行機とつなげて考えることができれば、また別の授業の展開ができたかもしれない。また、はじめに紙飛行機を見せたときの子どもたちの驚く様子と風に乗って自分たちの作った紙飛行機が風に乗って飛んでいく様子に興奮している子どもたちの姿が印象に残っている。

【自己変容について】

本研修では、学校訪問の際にアメリカの教員志望の学生たちと意見交流するという貴重な経験ができた。アメリカの学生が日本の教師の仕事量に驚愕していた姿が印象的であった。学校の制度や文化など日米の教育における違いを感じたり、日米の教師の子どもに対する思いを双方の教師が語り合い、同じような思いを持っていることを知ったりすることで、私自身の教育に対する視点が深まったと思う。



1. ねらい

本授業のねらいは、日本の伝統的な遊び、福笑いを体験することによって、日本文化に興味を持つとともに、日本人とアメリカ人が、共に笑い合える関係であるということを実感できることである。

福笑いは日本の伝統的な遊び文化のひとつで、「笑う門には福来る」との言葉のように遊ぶことで笑うことができる。また、顔のパーツや上下左右の指示などの簡単な言語で取り組むことができるため、異文化間であっても子どもから大人まで十分に楽しむことができる。日本文化を紹介することを通じて、子ども達に日本との交流に対してポジティブな感情体験をしてもらいたかった。そのポジティブな交流体験がグローバルマインドにつながると考えたからである。

2. 概要

授業は、まず、FUKUWARAIの紹介をした。教師がオカメの仮面をかぶり、登場し、自分の顔のパーツ（眉毛、目、鼻、口、ほっぺた）をつけるのを忘れたという設定で寸劇をしながら、のっぺらな顔に、顔のパーツをくっつけるという取り組みを提示した。出来上がったオカメを福笑いという日本の伝統的な遊びの、代表的な顔であるということを紹介した後、見本として全員の前で実際に、代表の児童一人に福笑いを遊ばせた。

児童が福笑い遊びのルールが理解できたところで4人1グループになり、それぞれの顔の輪郭に合わせ、創意工夫をこらし、顔のパーツを作る。1人1パーツを基本とし、完成し次第、ゲームに取り掛かる。

各グループ福笑いで用いる顔のパーツを完成させ全員が目隠しをして取り組むことができた。最後に、本日の授業の振り返りとして、感想シートを書かせた。



3. 成果と課題

笑い・楽しむという感情に関して、人間の文化差があまりないためもあってか、児童たちは福笑いを存分に楽しむことができているように感じる。また、ゲームに取り組んでいくにつれ、「ひげをつけていいか?」や「アクセサリをつけていいか?」などの質問が出て、児童の意欲的に取り組む姿を見ることができた。授業の感想シートには、「fun」や「exciting」、「enjoy」などが書かれてあった。その他には、「いく日本!!(日本語)」など日本に興味を示す内容が多く書かれてあった。また、教師に対して、「my friend」、「see you again」など我々訪問者と交流ができたことを喜ぶ感想が多く書かれていた。総じて、福笑いを楽しむことを通じて、日本に興味を持つこと、ポジティブな交流体験を多くの児童ができたと考えられる。しかし、授業の後半に、グループでの活動が遊び終え、落ち着いた印象を受けた。自身の授業の課題と感じられるのは、グループでの活動時間を十分にとろうとした結果であったが、授業後半では、臨機応変に、各グループでおもしろい顔を発表し合うなどしてクラス全体の交流を行ってもよかったと考える。

【自己変容について】

訪問先での一つ一つが自分にとって新鮮で考えさせられることが多かった。当然のことではあるが、子どもたちのことはじめ、教育に関してアメリカと日本で共通するところ、そして異なるところがあった。訪問先のみでアメリカの教育と考えるしてしまうのは大きな誤解をしてしまうことも多いであろうし、自分の中での日本の教育と比較して考えるのも誤解を生じる。アメリカにももっと色々な教育のあり方があろうし、日本にも色々な教育のあり方があると思う。今回の訪問で、教育の普遍性、そして多様性を改めて感じることができた。

1. ねらい

本時は、コミュニケーションを図る手段の1つとしてジェスチャーに着目させ、日本とアメリカにおけるジェスチャーを比較し、その共通点や相違点に気づくことをねらいとしている。またそうした比較やアメリカのジェスチャーに関するカードを制作することを通し、自文化を見つめ直す機会とすることができるのではないかと考えた。

2. 概要

授業の導入では、本時のテーマを示すとともに、ジェスチャーを使った伝言ゲームを行い、ジェスチャーがコミュニケーション手段の1つであることを確認させた。

展開の前半部分では、文化間のジェスチャーの違いに気付かせるための紙芝居を提示した。そして、日本とアメリカのジェスチャーを比較させるため、日本のジェスチャーを描いたカードを紹介し、それがどういう時に使われるジェスチャーなのか想像させた(写真)。また、それぞれのジェスチャーについてアメリカと同じであるか、それとも違うものであるかを確認し、表に整理していった。紹介の最後には特におじぎについて取り上げ、その背景や意味などについて説明した。

その後、児童は「アメリカのジェスチャーを日本の子どもたちに紹介しよう」という目的のもと、ジェスチャーの絵とその意味を書いたカードを作成した。

最後に、本授業のまとめを行うとともに、「他にも日本とアメリカで同じものや違うものがないか探してみしてほしい」「自分たちの文化に誇りをもってほしい」というコメントをし、授業を終えた。



3. 成果と課題

日本のジェスチャーとアメリカのジェスチャーを比較するところでは、児童はアメリカのジェスチャーを通して日本のジェスチャーの意味を考えるなど、実によく想像し、多様な意見を出していた。日本のジェスチャーという「知らないもの」を想像することは、児童にとっては難しいものであったと思われる。実際の授業では、教師がヒントを出すなどして児童の想像を促したが、両者の比較の仕方をよりよいものに改良することが今後の課題である。また、授業の後半で児童が作成したカードには、授業で扱ったジェスチャーを自分の絵や言葉で書き直しているものと、授業で扱ったジェスチャー以外を書いたものの2種類があった。前者を示した児童は、本時の内容をよく理解し、おそらく日本にも自分たちと同じジェスチャーがあることや、また一方で異なるジェスチャーがあることに興味を抱いたのだろうと思われる。また後者の児童は、本時の理解に加え、自分の生活を振り返りその中からジェスチャーを見つけており、本時の活動が自文化の理解にも繋がったと考えられる。さらに、児童の中には表情といったジェスチャー以外の非言語に注目している者もあり、児童の視点の広がりを感じることができた。授業の中ではできなかったが、これらの作品を使って日本の児童と交流できるとよりよい実践になると思われる。

【自己変容について】

今回の研修では、私個人の意見を求められる場面が多くあった。自分の思ったことを述べればよいと言われるとなんだかとても簡単なことのように思える。しかし日頃から興味・関心をもって物事を見ていないとなかなか自分の考えをもてないということに気がつき、さらにはそれを表現することの難しさも痛感した。だが、様々な人々と関わる中で、自分のことをもっと知ってもらいたいと思ったり、相手のことをもっと知りたいとも思うようになった。そしてそのためにはやはり自分の考えをもちそれを表現することで、相互の関係をよいものにしていけることが大切であると感じた。

第5 学年社会科「色々な地図」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 大村 正樹

1. ねらい

本授業のねらいは、アメリカ大陸が中心に描かれた地図と、日本列島が中心に描かれた地図と、北半球と南半球が逆になっている地図を見比べることを通して、世界には様々な見方があることに気付けるようにすることである。

2. 概要

まず、授業の冒頭に授業者の自己紹介をして、日本から来たということを説明した。そこで、アメリカ大陸が中心に描かれた地図を提示し、両国の位置を確認させたところで、日本が中心に描かれた地図を提示した。「この2つの地図の違いは何だろう」という発問をし、中心に描かれている国が違うことを押さえた上で、「どうして色々な地図があるのだろうか」という学習課題に繋げた。ここで、各自ノートに意見を書かせて、全体場で共有した後、南半球が上に描かれた地図を提示し、今までのものと比べて上下が逆になっていることを確認した上で、今度はどこの国が使っている地図が発問した。最後に、今日扱った3つの地図以外にも色々な地図があるが、世界の人々は共通した1つの地図を使う方がいいか、それとも異なった種類の地図を使う方がいいかを尋ね、再度各自ノートに書かせた上で、全体場で交流して、まとめにあてた。

3. 成果と課題

導入の自己紹介から2枚の地図を見比べて、「片方の地図は日本が端にあるけれど片方の地図はアメリカが端にあって日本が真ん中にある」という言葉は子どもからでてきたが、「どうして色々な地図があるのだろうか」という発問については、考える観点を与えなかったため、どのように自分の意見を書けばいいのか戸惑う子どもが何人もいた。更に、上下が逆になった地図はどこの国で使われているかという発問については、それまでの発問と比べていきなり難しくなったため、「アメリカで使われている地図はアメリカが上であって中心にあり、日本で使われている地図は日本が上であって中心にある」という補足説明をその場で加える必要があり、最終的にオーストラリア（ニュージーランド）という答えが出てくるまでかなりの時間がかかってしまったので、最後の発問を十分に交流する時間がなかった。しかし、世界地図を1つに統一した方がいいかという発問に対しては、統一した方がいいという意見の子どもが3人で、残りは異なっていた方がいいという意見であった。その理由としては、授業の意図である「色々な見方があるから異なっていた方がいい」「言語や文化が違うから地図も違うと思う」から、「上下逆の地図は逆さまにすると結局一緒になるから1つで構わない」や「地球は丸いから1つの地図に表すことは難しい」など、実に多様な意見が出された。授業全体の流れとしては、こちらが発問して子どもに考えさせる場面が多かったため、作業や活動を入れるとメリハリが出て尚よかったのではないかとと思われる。

【自己変容について】

外国人である自分がアメリカの子どもに対して、世界には様々な見方があるということを教えることに価値があるということにこだわったことが授業実践の何よりの原動力であったと思うので、やはり授業は目標が大切であるということを確認した。加えて、授業をするにあたって必要な点、留意すべき点は誰を相手にしようと同じであることにも気付いた。また、つたない英語であったが、授業以外の時間も含めて、こちらが話しかけると心を開いて聞いてくれたり笑顔で答えてくれたりしたアメリカの子どもに本当に助けられた。以前イギリスに留学した際に、「Personalities are more important than nationalities」という感想を持ったことがあったが、外国の方とかかわるときも、日本人と外国人である前に人と人なのだとすることに改めて気付き、まずは人とかかわりたいという気持ちを持つことが大切であるということを感じた。

1. ねらい

本授業のねらいは、筆を使って漢字を書くという活動を通して、漢字や日本の文化である書道に親しみ、そこから書道のよさである、文字を芸術とみることや、筆で書く心地よさ等を感じさせることである。

2. 概要

60分の授業時間を頂き、5年生に書道の授業を行った。最初に、自己紹介を行い、学校のイメージや感想を話した。

次に書道という日本の文化の紹介と、その使われている道具(文房四宝)の紹介を行った。さらに、書道では漢字が表現の対象であることから、漢字についての紹介を行い、子ども達とたくさんの漢字について学ぶ活動を行った。

そして、実際に筆と墨で漢字を書く活動を行った。初めて、見る文字、使う筆にも関わらず、ほとんどの子ども達は字形を上手く捉え、中には、そっくりに書く子どもの姿も見られたことは、大変驚いた。



出来上がった作品の鑑賞会をするはずであったが、時間の都合上、行うことができず書道のよさを子ども達が考える時間がなかった。そのため、最後に、口答で子ども達に、書道のよさと、書道という日本の文化を忘れないでほしいということを伝え、授業を終えた。

3. 成果と課題

日本の子ども達は、書写の授業により、ある程度、筆や漢字を書くことに親しんでいるが、米国の子ども達は、初めて筆を扱い漢字を知る。その点を、配慮して一時間の授業でまとめていくということは、大変難しいものであった。授業全体を通して、子ども達が書道のよさを考える時間がなかった点が大きな反省である。漢字の形や意味を知る活動や、作品を制作する活動には、力を入れたのだが、本来の書道のよさを全体で共有する時間がなかった。その点について、授業後、担任の先生に作品を鑑賞する時間や、感想を共有する時間をしてほしいという趣旨を伝えしたが、授業者、自らがそういった時間を授業内にもてるような授業案を作る準備が必要であったと感じた。

また、文字を書く活動では、ほとんどを机間指導により個別に書く様子から支援をしていったが、書く姿勢や筆の持ち方等を、もっと事前に丁寧に全体指導を行っておく必要があった。漢字を紹介する時間では、日本語での読み方やそれを全体で言うという時間や筆順を全体で確認するという時間を加えることで、もっと漢字への理解が深まったと感じた。

【自己変容について】

本研修を通じて、痛烈に実感したことは、自分のコミュニケーション能力の低さである。語彙や文法力の不足というハンディはあるが、そのようなことに恐れずに伝えようとする気持ち、姿勢、勇気が大切だということを、本研修を通じて学んだ。この視点を普段の生活でも意識し、大切にしていこうと思う。また、英語で授業をやり遂げたことは、大きな自信となった。

1. ねらい

本授業のねらいは「音」という面に注目し、日本で大切にされている音文化を紹介することを通して、日本に対する興味をもってもらうことである。今回、特に紹介する日本の音文化としては、日本で大切にされている「静寂」と、竹や木によって作られている楽器や音の出るおもちゃである。

「音」や「音楽」は、世界中に存在しているものであり、国境や言語の壁を越えて誰もが共有することのできるものである。しかし、国や地域によって好まれる「音」や「音楽」には特徴がある。また、楽器やおもちゃの素材も異なってくる。日本の伝統的な音文化を知ることにより、自国の音文化にも興味をもてもらいたい。

2. 概要

まず、「静寂」の状態をつくるために、音を出した後余韻の残るような楽器(今回はシンバル)を使用し、音を出した後、その音が消えたと感じた瞬間に手を挙げてもらうという活動を行った。どんどん消えていく音に注目することで、自然と子ども達が落ち着き「静寂」の状態をつくることができると考えた。次に、「静寂」の状態では、周囲の音に耳を傾けてみるという活動を行った。「静寂」の状態では、それぞれの耳が普段よりも研ぎ澄まされた状態になる。そのため、普段、自分の周りには意識しないような音も聴くことができると考える。実際に、聴こえた音をたずねると、エアコンの音や通りの車の音をはじめ、自分の呼吸の音や心臓の音、友達が咳をする音や移動した音など、様々な音を聴くことができていた。

この授業のメインは、聴こえた音がどの楽器やおもちゃから出た音かを考えるという活動である。そのために、日本の伝統的なおもちゃや楽器の写真を用意しておき、授業者が隠れて出した音がどの写真に写っているものから出たのか予想してもらう。子どもの予想を聴いた後、実物を示すとともに、日本での使われ方や日本の曲なども紹介した。この活動の応用として、写真の楽器やおもちゃがどのような音を出すのかを予想した後、実際の音を聴いてみるという活動も行った。



最後に、日本の伝統楽器の一つである「笙」を紹介し、日本の伝統楽器の特徴として竹や木で作られているものが多いこと、それぞれの地域で音楽には特徴があることを伝えた。その上で、音楽はどんな人でも共有できるものであり、色々な音楽を聴いてもらいたいということで授業を締めくくった。

3. 成果と課題

予想していた以上に子ども達が大人しく、「静寂」をつくるという活動を効果的に使うことができなかった。また、「笙」が和音を演奏する楽器ということもあり、音を紹介するだけにとどまってしまった。しかし、子ども達は、日本のおもちゃや楽器に大変興味をもって来ており、積極的に発言をしたり活動に参加してくれたりした。音楽は、言語という壁を越えて伝わっていくということを実感できる授業であった。

【自己変容について】

今まで、アメリカの子ども達は日本の子ども達とは全く違う性質をもっているものと思っていたが、それは間違いで、国は違えど根底にあるものは同じなのだということを実感した。アメリカの教育を体感する中でその良い面が見えてくると同時に、今まで意識しなかった日本の教育の良い面も考えることができた。外国の良いものは取り入れつつも、元々日本が持っている良い部分を活かせるような教育を考えていければと思う。

第5学年 算数「五目並べ」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 鷲見 勝司

1. ねらい

- ・五目並べに親しみを持つ。
- ・白石又は黒石を五個、横か縦か斜めに先に並べた方が勝ちとなることを理解する。
- ・どのように黒石又は白石を並べていくと勝てるか考えることが出来るようになる。

2. 概要

授業のはじめ碁盤を書いた模造紙を黒板に掲示して「これはなんですか。」と児童に尋ねた。すると、「Fishig Net」,「Graph」等の返答があった。指導案では次に circle card(白, 黒の碁石の代わり)を順番に置いていって、蛇の形をつくる計画であったが時間がないので省略した。

次に「I'll explain how to play Gomoku-Narabe game.」と言って五目並べのやり方の説明に入った。No.1 と書いた模造紙に13路の網目を書いて、黒石が縦に5個並び、白石が縦に5個並んだものを示して「Line up in a vertical line like this.」と言って黒板に掲示した。次に No.2 と書いた模造紙に13路の網目を書いたものに黒石が横に5個並び、白石が横に5個並んだものを示して「Line up to the side like this.」と言って黒板に掲示した。次に No.3 と書いた模造紙に13路の網目を書いたものに黒石が斜めに5個並び、白石が斜めに5個並んだものを示して「Line up diagonally」と言って黒板に掲示した。そして次の No.4 では No.1 から No.3 までの纏めとして縦、横、斜めに白石、黒石が混ざり合ったもので、あと1つ黒石をある場所に置くと黒を持っている人が勝ちになるものを示して「Where do you put on a black circle card to make line with 5 black cars?」と尋ねて、児童に挙手させ、1人の児童を指名して black circle card(黒, 石の碁石の代わり)を置かせてみると正解だった。同様のことを No.5 では White circle card でも実施した。No.4 では白, 黒の碁石に置いていった順番に番号をつけていたが No.5 ではつけなかったにもかかわらず正解だった。

そこで、3人が1グループになるように言って碁盤、碁石、得点表を教師のところへ取りに来させた。そして一人は審判員で勝った人に○印、負けた人には×印をつけ、あとの2人が五目並べのゲームをする。4回対戦して終わりとするように言った。五目並べのゲームを1人4回するのに約10分かかり、どんなストラテジーなら相手に勝てるか考える授業展開まで進められなかった。

3. 成果と課題

五目並べに興味を示したのは良かった。しかし五目並べのゲームをしている時、机間巡視をして見ていると勝つ者は勝ち続け、負ける者は負け続けている児童がいるグループがあった。勝ち続ける児童はどのように白石、又は黒石を置けばよいのか理解してののではないかと思われる。又負け続けている児童は、五目並べのゲームのルールは理解したが、勝つ方法が分からないかルールをしっかりと理解してないからであろう。またストラテジーを考える授業展開まで進められなかったことが原因の1つであると思われる。次に天元、碁盤、碁石等の日本語を使いながら授業を進めたが解説を十分にすることができなかったが児童に五目並べゲームをするセットをプレゼントすることを伝えると大変喜んでいたので、ゲームをやりたい気持ちにさせたのは確かであろうと思われる。

【自己変容について】

自分のアイデンティティー、研究目標をしっかりと持っていることが大切です。それをベースにして異文化体験、教育観、自分自身を振り返ってみると、全ての異文化も教育も人がつくりだしたもので、似ている物がたくさんあるが詳しく見ていくと違う物もあることが分かった。

次にアメリカは大変広い国土なんだなあとということでした。その影響を受けてアメリカの人は少々のことにはこだわらない性格の人が多いのだと改めて実感した次第です。

第5学年言語「地球の人も言葉もつながっている！ - 日本の文化と言語」

教育学研究科国語文化教育教育学専攻言語文化教育教育学専修 吉浪 徳香

1. ねらい

本授業のねらいは、「世界が平和であればこそ人や文化や言語も交流し、また互いの文化や言語を尊重し合えることに気づくこと」である。言語は、その国や土地の歴史や文化を背景にして生まれ、そこに暮らす人々によって育まれる。日本の歴史や文化を背景にして生まれた仮名文字や豊かな言葉を、文字や写真と共に紹介することで、日本の豊かな自然や文化や、人々が自然と共生していることを伝える。さらに、簡単な日本語を紹介し、言葉をとおしてコミュニケーションを図る。

その日本の仮名文字は中国の漢字から発明された。また日本語の中には、「コミュニケーション」など、英語から取り入れられた多くの外来語も存在し、「judo」など日本語が英語の中で使われている言葉もある。世界中の国々の人々が交流し、それに伴って「言葉」も交流し、影響をうけ合ってつながっていることを伝える。そして、世界が平和であればこそ人や文化や言語も交流し、また互いの文化や言語を尊重し合えることに気づかせる。以上のようなねらいで、本単元を設定した。

2. 概要

まず日本語の挨拶の言葉を教え、コミュニケーションを図った。次に、日本語のかるたとりを行った。代表の児童が発音を聞いてカードを選び、写真を見ながら一緒にその日本語を発音した。「いね」「ゆかた」など日本の自然や文化を感じられる言葉を選び、思考の手助けになるようローマ字を添えた。生徒達は、積極的に挙手し、意欲的に活動に取り組んだ。次に、この仮名文字が漢字から発明されたこと、



英語も外来語として、たくさん日本語の中に入っていることを伝えた。このように地球の様々な国の人々が交流し、それに伴って言葉もグローバルに交流しており、その交流には「世界が平和であること」という条件があることに気づかせた。「世界が平和でなければ、人は自由に交流できず、互いの文化や言語の違いを理解し、それを尊重し合い学び合い交流させることはできないこと」を伝えた。そして、日本の子どもが絵を描いた絵手紙に、児童が筆ペンで好きな日本語を書いた。日本の子どもが絵を描き、米国の子どもが日本語を書いた合作である絵手紙を子どもたちに贈り、感謝の言葉を述べて授業を終えた。

3. 成果と課題

成果は大きく次の3点である。「世界が平和でなければ、人は自由に交流できず、互いの文化や言語の違いを理解し、それを尊重し合い学び合い交流させることはできない」というメッセージを伝えたこと。合作の絵手紙をとおして「平和」というメッセージが息づくことが期待できること。児童が日本の文化と言語に興味・関心をもったこと。課題は、児童が書いた絵手紙の言葉や活動から、交流やまとめにつなげることである。授業で大切にすることは、どの言語で授業をする場合でも変わらない。また、この体験をこれからの実践につなげることが大きな課題である。

【自己変容について】

私は、今回の実地研究の授業や多くの人々との出会いをとおして、人々は互いの違いを理解し尊重した上で、つながり合うことができると強く実感した。逆に、つながり合うためには、互いのことを学び、理解し合うことが大切であると感じた。そのために「国際交流」や「異文化体験」の意義がある。また「相手に心をひらくこと」と同時に、「言葉」の大切さを再認識することもできた。これから出会う生徒達にも、「言葉」と「体験」の大切さ、広い視野で見ることの大切さ、さまざまな違いを超えて人々が交流し合い、コミュニケーションし、理解し合うことの大切さを伝えていきたい。この体験をとおして、より実感を伴った言葉で、子どもたちに語っていくことができる。また、ヒロシマに住んでいるものとして、「平和」というメッセージを忘れてはならないと改めて感じた。

1. ねらい

本授業のねらいは、作品の制作や比較を通して平和についての考察を深め、自国の文化や日本の文化への理解を高めることである。

2. 概要

はじめに、本時の柱となるデザインについての認識を深める活動を行った。質問をしながら、デザインは時にメッセージや意味を含んでいるということを全体で確認していく作業である。その際「日本語」、「制服」なども例に挙げ、日本文化の紹介も簡単に行った。

これらのことを踏まえた上で、実際に「平和」をイメージしたTシャツをデザインしてみようと投げかけたが、生徒たちの間に戸惑いが感じられたため、先に日本の中学生の作品を紹介することにした。事前に日本の中学生らに平和Tシャツのデザインをさせていたのである。作品例を見て要領を得たことで、生徒たちは作品作りに取り掛かりはじめた。

作品完成後、幾人かの生徒に作品を紹介してもらい、特徴や感想などを述べてもらった。それからクラス全体で今日の授業を簡単にまとめ、授業の結びとした。

なお、作品制作の際、生徒たちから日本語についてなどの質問があがってきたため、他のメンバーにサポートに入ってもらいながら授業を行った。

3. 成果と課題

今回の授業で大事にしたかったのは、「平和というものは、いったい何だろう?」と考えるきっかけをあたえること、そして、作品の制作や比較を通して、「平和というのは、難しいものではなく、相手のことを知りたい、知ってもらいたい、仲良くなりたいということでもありえるのではないだろうか?」と投げかけるということであった。しかし、肝心の結びの場面でそれをうまくクラス全体で考えることができなかつたように思う。また、前に立って作品を紹介してくれた生徒の発言を十分に拾うことができなかつたのも心残りである。

とはいうものの、生徒たちはときおり日本についての質問を挟みながら、熱心に作品を制作してくれた。また、作品発表の際は、積極的に作品を説明してくれたり、前に立つ勇気が出せないでいる子どもに対して、クラスメイトが後押しをしてくれたり、非常によい場面も多くみられた。その様子が印象的であり、このようなクラスの雰囲気について詳しく調べてみたいという感想を持った。

作品の制作に関しては、事前に日本の中学生に制作してもらったときと似たような反応だったのが興味深かった。生徒たちはそれぞれ、互いの国に興味をもっているようである。作品の内容についても様々な相違点や共通点が見られ、こちらも興味深かった。

【自己変容について】

「やっぱり授業って面白い!」「やっぱり子どもってすごい!」
遠い異国の地で、再認識させられた。確かに制度上、組織上違いはたくさんある。もちろん、そこに興味を抱いたのも事実である。しかし、なぜか私が一番心に残ったのは「あ、一緒。」ということであった。そして、この発見を一番大事にしたいなと思っている。比較というと、ついつい違うところばかりに目がいきがちであるが、この「同じ」という点を大切に深めていきたいと考えている。今回、このような貴重な体験をさせていただき、本当に感謝しています。

1.ねらい

本授業のねらいは、日本の伝承文化である「折り紙」の楽しさやそれにまつわる風習を紹介するとともに、「折り紙」を通して日本とアメリカの子どもたちの心の交流を図ることにある。具体的には次の3点である。

「かぶと」や「鶴」を折ることを通して、折り紙の楽しさを味わうことができるようにする。日本には「かぶと」や「折鶴」に喜びの気持ちや願いを込める風習があることを知らせる。

「折鶴」とメッセージを通して、異なった国の子どもたちどうしが心を通わせることができるようにする。

2.概要

- (1) 日本の子どもたちに折り紙文化が根付いていることを知らせ、折り紙に興味をもつことができるように、本校の5年生と一緒に作ったDVDや折り紙作品集を見せた。さらに、折り紙で何かを作ってみたいという意欲を喚起するために、作品集を見せながら「これは何でしょう」というクイズを出した。
- (2) 「かぶと」に興味をもつことができるように、「かぶと」をかぶった本校の5年生の子どもたちの写真を見せた。日本には子どもたちの健やかな成長を願って「かぶと」を折る風習があることを知らせ、日本から持参した大き目の広告紙を使って一緒に「かぶと」を折った。
- (3) 1m四方の紙で折った巨大折鶴を提示し、折りを解いていくことで一枚の正方形の紙から折鶴ができることを知らせた(写真1)。子どもたち一人一人には折り線を描いた折り紙を配り、ひとつひとつの工程を一緒に折りながら「鶴」を完成させていった。
- (4) 本校の5年生の子どもたちからのメッセージと折鶴を封筒に入れたものを一人一人に手渡し、返信のメッセージを書いてもらった。



3.成果と課題

全員に鶴を折ってもらいたいという願いをもち、様々な準備物を用意した。準備したものは、それぞれの場面で子どもたちの関心を高めたりかぶとや鶴を折る際の助けになったりした。

本校の5年生からの折鶴とメッセージはとても喜んでくれた。返信のメッセージの中には、「いつか会いたいに行きたい」「文通しませんか?」「あなたの好きなことは?」など、またこちらから手紙を送りたくなる内容のものがたくさんあり、心の交流が芽生えた。

準備物に頼りすぎて、的確な指示やアドバイスをすることができなかった。また、鶴を折ることのみが目的のような授業を展開してしまい、「折鶴」のもつ文化的背景に十分に触れることができなかったため、日本文化を伝えるための授業としては不十分であった。

【自己変容について】

アメリカでは、日常のあいさつから笑顔が生まれ心が通い合うことを実感した。先生方からは、子どもたちの学ぶ姿勢や態度を精一杯ほめることで、一人一人が学ぶ喜びを味わい、意欲をもって伸びていくことを学んだ。お互いの国の文化や社会には違いがあり、相手を理解するということは言葉で言うほど容易ではないと思う。しかし、お互いに違う部分があるのはあたりまえであり、それを受け入れようとするからこそ、自分が豊かになれるのだと考えられるようになった。

4. 体験型海外教育実地研究についての評価

(1) 大学院生等による授業についての評価

2007年度米国ノースカロライナ州において実施された授業の一覧は次のとおりである。

	学年	教科等	題材・テーマ
A	3	総合(異文化間教育)	Let's communicate by gesture!
B	3	音楽科	静寂を感じて「日本の音」を楽しもう!!
C	4	Culture Education<Arts and Crafts>	Let's exchange! The "Origami"
D	4	図画工作科	Paper Plane
E	5	異文化理解	Japanese culture FUKUWARAI
F	5	社会科	色々な地図
G	5	書道科/国語科	筆を柄って、漢字を書いてみよう
H	5	算数	五目並べ
I	5	言語	地球の人も言葉もつながっている! 日本の文化と言語
J	7	総合	Tシャツを通した平和理解

(教科等名は任意に付したものであり、授業を実施した当該校にとっては教育課程外のいわゆる投げ入れの授業となっている。)

教科等の選択、題材・テーマは、参加者に任されている。学年についても概ね参加者の希望にそっている。

参加者は、日本での事前学習において目標、内容、教材、教具、授業過程などについて協議し、具体的な準備を進めた。また、出発前に英文の指導案を作成し、現地に持参した。現地では、受け入れ校の関係教員と短時間の打ち合せを行い、授業に臨んでいる。参加者は、通訳を介すことなく英語で授業を実施した。

授業構成力、実践的指導力の向上という観点から、授業を通した主な成果は、次の3点に整理できる。

教育内容の選択の視点

上掲の一覧表のとおり、実施された授業の教科等の枠組や学年は様々である。しかし、いず

れも日本あるいは広島を意識した内容を設定して授業を構成している。各参加者が、遠く米国ノースカロライナ州において授業をすることの意味を吟味した結果として評価できる。(すべての授業が該当) また、日本や広島を意識した授業は、米国の子どもたちにとって異文化理解であるとともに自文化理解にも繋がっている。(例えば、表内A,F)

学習形態を意識した指導法

参加者は、ねらいに迫るために、個別、小集団、一斉という学習形態を意識した授業を行っている。(例えば、表内のJ,H) 学習場面に応じて学習形態を転換することで、海外の指導者と出会い異文化と向き合う中で生じる戸惑いや緊張を緩和するとともに、個別の指導も可能にしている。(例えば、表内のE,G,I)

理解を助ける教具等の工夫

異文化体験という観点から具体的な活動を取り入れた授業が多く見られた。しかし、これを成立させるためには適切な教具が必要である。多くの授業において、児童の手元の材料の拡大版を用意する、材料に細かい印を付す、実際に手にとって試す場をつくる、などの工夫がなされていた。(例えば、表内C,D,J)

このように、わずか1~3時間の授業実践であったが、参加者の授業構成力、実践的指導力の向上をみることができる。今回の参加者は英会話能力に優れており授業を円滑に進めることができた。その一方で、言葉に頼りすぎる場面も見られた。児童、生徒とのコミュニケーションについては、より多様で具体的な方法を備えることが課題となる。

(2) アンケートの分析結果

研修中(合計3回実施)、研修後に、参加者の意識変容等を問うアンケートを実施した。アンケートから得られた参加者の意識変容に関する記述を意味単位で区切った後、文部科学省教育職員養成審議会第3次答申(1999)の「今後特に求められる資質能力」に示された3つの観点(：地球的視野に立って行動するための資質能力、：変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力、：教員の職務から必然的に求められる資質能力)をもとに分類を行った。また、それらに影響を与えた体験についても同様にアンケートから得られた記

述を意味単位に区切り，調査者が記述の内容に基づいて分類を行った。その結果，「授業実践」，「交流」，「見学」の3つのカテゴリーを抽出した。そこで，「今後特に求められる資質能力」の3つの観点それぞれについて，参加者の得た体験がどのように関連しているのかをまとめ，表1(研修前)，表2(研修後)に示した。

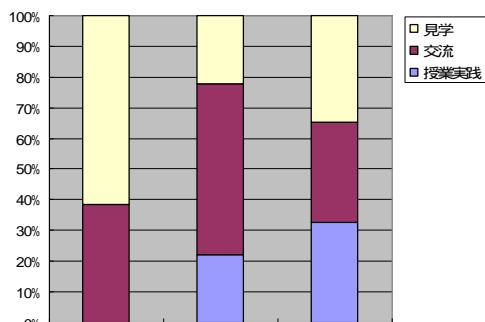


表1 参加者の意識変容と参加者が得た体験(研修前)

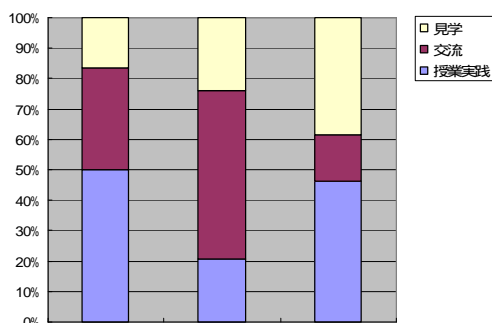


表2 参加者の意識変容と参加者が得た体験(研修後)

()地球的視野に立って行動するための資質能力について

研修中：学校訪問で子どもの様子や子どもと先生とのやりとりを見て，子どもたち一人ひとりが尊重されていることや，教師の悩み等はどこへ行ってもそれ程変わらないことを感じるようになった。

人間尊重の精神，人間観，考え方や立場の相違の受容

研修後：人や文化の多様さ，自国の教育といったものを尊重する姿勢が，授業実践を通して育まれたと感じるようになった。

多様な価値観を尊重する態度，自国の教育を理解し尊重する態度

()変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力について

研修中：子どもや先生方と関わる機会が多く，その中でコミュニケーション力(特に英語力)が必要とされる場面が多かった。どのようにすれば相手に伝わるのか，どのようにコミュニケーションを取っていく必要があるかを考えなければならなかった。

自己表現力，英語力

研修後：現地の人との関わりの中で，相手を理解しようとし，相手の考え方や特性を受け入れていこうとする態度を日々意識するようになった。

コミュニケーション力，社会性，対人理解

()教員の職務から必然的に求められる資質能力について

研修中：先生方の授業を見たり，授業実践をしたりする中で，先生の子どもに対する受容的な態度を学ぶとともに，アメリカと日本の教育との違い，カリキュラム等についての考えを得ることができた。

子どもの個性を生かす能力，カウンセリング・マインド，教育に関する知識，子ども観

研修後：授業実践では，様々な準備や授業の振り返りをしたことで，よりよい教え方を考えたり，教師としての責任感を感じるようになった。また，子どもとの関わりの中で，子どもへの接し方はどこであっても変わらないと考えるようになった。

教科指導能力，教員としての使命感，教育観

このように現地の教育に直接触れることができるという本プログラムの特徴が，語学研修や国内での教育実地研究では得られにくい意識変容をもたらすことが示唆された。

5. おわりに

昨年に引き続き第2年目を迎えた広島大学大学院教育学研究科「体験型海外教育実地研究」は，将来，海外の学校との連携・交流などを推進できる人材育成を行い，さらにそのためのプログラム開発を行うことを目的に実施された。今年度の参

加者は、日本側から現職教員・大学院生 10 名、引率教員 4 名、そしてアメリカ側からはパートナー校教員 3 名、そのほかエクスプローリス中等学校およびイーストカロライナ大学教員で、昨年よりも規模が拡大した。広島大学大学院教育学研究科の協定校との人的ネットワークを活用しながら、本プログラムにおいては海外での実地体験を目標に、その事前・事後に多くの時間をかけて授業作りに取り組んできた。その成果として、つぎの 3 点を挙げることができる。

第 1 に、参加した大学院生および現職教員の実践的指導力の向上に寄与することができた。日本の文化や事情を全く知らない生徒たちに英語で教えることを前提に、日本文化紹介のための教材を開発し、授業を構想することは参加者にとっては大きな挑戦であった。今回は、日本を紹介するという一方的な授業展開だけでなく、日米との文化比較による教材化、さらには生徒の共同参加を促した体験交流型の授業展開も見られ、さらに実りの多い実地体験になったと思われる。

第 2 に、授業作り、授業実践を通して、教員としての意識の変容、高まりが見られたことを指摘することができる。日米で同じことが微妙なニュアンスによって伝わらなかったり、日本独特と思ったことが実は日米に共通することが分かったり、まさに疑問と感動のサイクルの繰り返しであった。特にアメリカの教員および教員志望学生との交流を通して双方の教育に対する思いを語り合うことによって、教育の多様性と普遍性を意識すると同時に、参加者自身の教育に対する意識や視点の深まりを涵養することができた。

第 3 に、今回の交流を通して、個人間のフレンドシップが学校間の交流を通じたパートナーシップの推進につながったことが挙げられる。これまでの活動を知って、本センターへの訪問やアメリカ各地の学校からの交流希望も寄せられるようになった。一つの題材、一人の教師、一つの学校でできることは小さいかもしれないが、グローバルな資質や能力、高度な実践力を持った教員によって構築されたネットワークが今後も拡大することが期待される。そしてそれを可能にするようなプログラムの枠組みをほぼ確定することができた。

今後の課題として、日米両国の学期の違いから最適な訪問時期をいつに設定するか、今後、増え

てくると予想される海外からの交流希望にどのように対応するか、さらにプログラムへの支援をどこに求めるか、などがある。

最後に今回のプログラム実施に際しては多くの人々および団体の協力があったことを指摘しておきたい。アメリカ側のまとめ役として協力して下さったイーストカロライナ大学教育学部のレッドフォード先生、実習校であったエルムハースト小学校のスザン先生、G. R. ウィットフィールド校のパム先生、ウオールコーツ小学校のワトソン先生、エクスプローリス中等学校のケビン先生には心よりお礼を申し上げたい。また、多大な助成と助言をいただいた米日財団、さらに実施にあたって支援いただいた広島大学大学院教育学研究科学生支援・教育研究活動支援の両グループにも感謝申し上げたい。



写真 3 ECU キャンパスにて

引用文献

- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥・岩城宇紀・武田由紀子・長江綾子・丸子保子・大里弘美・為重友馨・村島唱子・林万青也・Carolyn Ledford・Suzanne Hachmeister 2007 大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究報告 学校教育実践学研究 13, 1-9.
- 文部科学省 1999 教育職員養成審議会第 3 次答申

2. 第3回学校間交流国際フォーラムの開催

(1)フォーラム概要

1 日 時：2007年6月9日(土) 13:00-17:30

2 場 所：広島ガーデンパレス

3 内 容：開会行事(13:00-13:15)

- ・小原 友行 GPSC センター長挨拶
- ・坂越 正樹 広島大学大学院教育学研究科長挨拶
(総司会)朝倉 淳(広島大学大学院教育学研究科・准教授)

第1部 実践発表(13:15-14:30)

- ・「幼稚園における国際交流体験」
洲濱 美由紀(広島大学附属三原幼稚園・教諭)
- ・「テディベア・プロジェクト」
林 万青也(東広島市立三ツ城小学校・教諭)
- ・「SSH高校生海外研究発表」
久保田 眞吾(広島県立広島国泰寺高等学校)
- ・「体験型海外教育実地研究」
神山 貴弥(広島大学大学院教育学研究科・准教授)

第2部 シンポジウム(14:45-17:15)

「グローバルマインドをもつ教員養成のこれから - local から global へ」

- ・コーディネーター・司会
小原 友行(広島大学大学院教育学研究科・教授)
深澤 清治(広島大学大学院教育学研究科・教授)
- ・パネリスト
Carolyn Ledford(イーストカロライナ大学)
「Teaching fellows による日本の学校訪問について」
Bradford Walker(ノースカロライナ大学ウィルミントン校)
「日本人大学生によるアメリカの学校訪問について」
Lois Petrovich-Mwaniki(ウェスタンカロライナ大学)
「日本語プログラムに参加するアメリカ人学生の期待」
小野 由美子(鳴門教育大学学校教育学部・教授)
「グローバルマインドをもつ教員養成のこれから」
米川 英樹(大阪教育大学教育学部・教授・留学生センター長)
「グローバルマインドをもつ教員養成研修プログラム開発と評価」

閉会行事(17:15-17:30)



(2)シンポジウム「グローバルマインドをもつ教員養成のこれから - local から global へ」における
各パネリストからの提案概要

Carolyn Ledford 先生 (イーストカロライナ大学)



アメリカ合衆国ノースカロライナ州にあるイーストカロライナ大学では、教員志望学生 (teaching fellows) をこれまでに数度、イーストカロライナ大学 Teaching Fellows Program の Summer Study Trip の一環で、広島大学教育学部そして附属三原幼稚園・小学校・中学校や附属東雲小学校・中学校に派遣してきている。レッドフォード先生は、プログラムの内容と、アメリカの大学生には日本の学校制度、授業風景、生徒たちはどのように映るのか、またそれが将来にどのようにつながっているのかその教育的効果について報告された。

学生たちは広島市内でのプログラムの活動として、広島の歴史、多様性と文化、道徳・人格教育、平和の大切さなどを学びながら、事実に基づいて原爆や第二次世界大戦についてどのように考えていったらよいかの結論を出すことを求められる。また、附属学校では、日本文化が学校のカリキュラムにどのように反映されているかを学ぶために、生活様式の尊重、学校掃除文化、文化の価値付け、健康な生活、一日の学校生活の中での責任感、国際交流学習、ホームステイなどの体験を行う。

このような活動を通して、教員志望学生全員が、グローバルマインドを自ら獲得していったことが報告された。

Bradford Walker 先生 (ノースカロライナ大学ウィルミントン校)



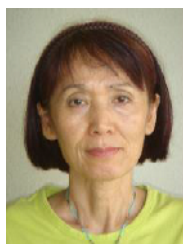
ノースカロライナ大学ウィルミントン校では、大阪教育大学から学生を受け入れている。日本人学生の留学・受入は、日本人学生が異文化体験によって変容するだけでなく、米国の学生や教員にとっても異文化体験であり自らの文化を見つめ直す機会になっている。学校教育の現状についても、双方の気付きや疑問が率直に話し合われることによって、それぞれの学校教育の意味や在り方について考察することができる。これからの教員養成における重要な内容や方法として国際交流の果たす役割を積極的にとらえ、その推進や発展に取り組んでいきたいとの旨が報告された。

Lois Petrovich-Mwaniki 先生 (ウェスタンカロライナ大学)



異文化体験は教師前教育においては、どのようなコース科目よりもかけがえのない大きなインパクトがあることをまず強調された。また、フロアの日本人学生から、国際交流は大切と思っても、たとえば実際に身内が外国の人と結婚するとなると二の足を踏んでしまう日本人が多いことをどう捉えたらいいか、という質問に対して、ご自身の国際結婚の例に触れながら、結局、本人たちの問題であり、そのような状況を当人たちがどのように捉えるかにかかっている、それを受け入れていくしかない、という見解を示された。

小野由美子先生 (鳴門教育大学学校教育学部)



日本の教職をめざす学生は、外国人児童に対しての学習権保証については高い意識を持っているにもかかわらず、いざ担任をするとなった場合に受容傾向が低いことを示し、グローバルマインドを持った教員の養成には、カリキュラム開発が不可欠であることを提案された。具体的には、1) 教員養成大学だからできる国際教育協力、2) 日米フレンドシップ・プログラム参加学生の学びについて、の2つの取り組みから得られた成果についてお話しをいただいた。

米川英樹先生（大阪教育大学教育学部）



大阪教育大学では地元の教育行政機関と協力して、教員採用試験に合格した学生がその資格を有したまま修士号を取得するために大学院で2年間学ぶことができるプログラムを設立した。この期間に、教師としての専門性をより高めることがねらいであるが、そのためにこのプログラムでは4つの内容を用意した。そのうちの1つが外国の姉妹校における海外教育実習であり、現地でのワークショップへの参加や学校訪問等が含まれる。このように大阪教育大学では、教員の高度な専門性育成の中にグローバルマインドをもった教員の育成を位置づけてプログラム化していることが報告された。

3. 講演会の開催

(1) 講演会の概要

日時	2007年6月8日(金) 13:10-14:30
会場	広島大学大学院教育学研究科 C棟5階 527室
演題・講師	イーストカロライナ大学における初等教育教員養成 “Becoming a Teacher: Elementary Education at East Carolina University” 講師 Dr. Carolyn Ledford (イーストカロライナ大学准教授) Dr. Betty Peel (イーストカロライナ大学准教授) G. R. Whitfield School (K-8) におけるカリキュラムコンパクト化 “Curriculum Compacting” 講師 Ms. Pam Justesen (G. R. Whitfield School TAG教諭)
参加者	広島大学学部学生、大学院生、大学教員、学校教員、センター研究員ほか、60名

(2) 講演会の実施状況と成果

レッドフォード氏及びピール氏からは、イーストカロライナ大学における初等教育教員の養成について、学年毎の履修科目や教育実習の状況などが具体的に説明された。また、ジャステセン氏からは、勤務校におけるTAG(Talented And Gifted)クラス用の凝縮型カリキュラムについて、その考え方や実際の様子などが解説された。いずれも、日本の現状との相違点が数多く見られたこともあり、講演の後に活発な質疑応答がなされて、理解を深めることができた。



4. ゲスト・ティーチャーの招聘

2007年10月19日(金)、アメリカ合衆国バーモント州の職業科(住宅建築担当)高校教師ボブ・クラベル氏が広島大学教育学部を訪問された。3年生対象の授業「比較文化学習論」(深澤担当)で、英語圏文化での呼びかけ語(address terms)がトピックであった際に、ゲスト・スピーカーとして学生への話題提供と、その後、学生との短い対話セッションに参加していただいた。

まず、クラベル氏は、高校生が入学したとき教師に対する呼びかけ語はさまざまなバラエティがありそれをどう正していくのか大きな課題であること、教師に対しては、決してファーストネームで呼ばせることはなく、Mr.などのタイトル+ラストネームであること、呼びかけ語は、学校という環境での生徒指導ではとても大切なことであること、などを話された。

その後、学生から、アメリカでは先生も生徒もみんな、ファーストネームでお互いを呼び合うものと思っていた、教師と生徒の人間関係はもっとインフォーマルなものと思っていたので、むしろ現在の日

本よりも厳しいのではないかという印象を持った、などという感想や意見が出された。

アメリカの州によっても違いがあるので、厳密な一般化をすることはできないが、いつの間にか形成され、私たちが普段持っている異文化に対する固定観念がいかに偏った見方や経験に基づいていることを理解するのに十分であった。学部生は普段よりもはるかに積極的に授業に参加し、数人から自発的な質問やコメントも出され、授業後も高い満足度評価が寄せられた。わずか 30 分という短い時間しかないのが残念であった。

5. ワークショップの開催

広島大学附属三原学園とウォルコート小学校(米国ノースカロライナ州グリーンビル市)、及び広島大学附属東雲中学校とエクスプローリス博物館立エクスプローリス・ミドルスクール(米国ノースカロライナ州ローリー市)の各パートナー校間の相互交流を促進するために、附属三原学園から 2 名、附属東雲中学校から 3 名(内 2 名は学校からの派遣)の教員、GPSC 研究員(大学教員)1 名をパートナー校に派遣し、ワークショップを開催した。

(1) 附属三原学園とウォルコート小学校とのワークショップ

日時 2007 年 8 月 22 日(水) 8:00~11:30
場所 ウォルコート小学校
テーマ 「国際科」、音楽科、及び図画工作科の展開

(2) 附属東雲中学校とエクスプローリス・ミドルスクールとのワークショップ

日時 2007 年 8 月 20 日(月) 15:00~16:00 23 日(木) 10:30~12:00
場所 エクスプローリス・ミドルスクール
テーマ 教員研修の方法と課題、両校における国際理解教育の現状と展望
「携帯電話」、「水」をテーマにした総合的学習の構成

6. 生徒相互訪問交流事業の支援

姉妹校として交流協定を結んでいる広島大学附属東雲中学校とエクスプローリス博物館立エクスプローリス・ミドルスクール(米国ノースカロライナ州ローリー市)との生徒相互訪問交流を支援した。両校は、相互訪問を通して、親睦を深めるとともに、今後の交流の継続・発展について確認した。また、双方の総合的学習の展開に参加し、学習を深めることができた。なお、両校の交流事業の状況や成果は、附属東雲中学校が開催した教育研究会(2007 年 11 月 22 日実施)における総合的学習ポスターセッションで発表された。

(1) エクスプローリス・ミドルスクールからの第 4 回訪問受入支援

受入期間 2007 年 6 月 15 日(金)~6 月 24 日(日)
受入人数 生徒 6 名 教員 3 名
主な活動内容 ホームステイ 歓迎式 授業参加 平和公園・平和記念資料館見学等文化体験
送別会・送別式
主な支援内容 受入コーディネータ支援 パートナーシップの継続・発展の協議

(2) エクスプローリス・ミドルスクールへの第 5 回訪問支援

訪問期間 2007 年 8 月 18 日(土)~8 月 26 日(日)
訪問人数 生徒 7 名 教員 3 名
主な活動内容 ホームステイ 歓迎式 授業参加 文化体験 米国伝統文化学習(博物館見学)
送別会 送別式
主な支援内容 訪問コーディネータ支援 訪問引率 体験・見学指導
パートナーシップの継続・発展の協議

(3) 米日技術教育プログラムへの支援(US-Japan Technical Education Study Program)

米日技術教育プログラムの一環として、アメリカ合衆国バーモント州のハートフォード地域技術教育センター（Hartford Area Career and Technology Center）の派遣で、2007年6月22日、代表のボブ・クラベル氏（Bob Clavelle） 高校生13名、引率教諭6名が広島県立広島工業高等学校を訪問し、生徒会役員との交流会を行った。午後は、平和公園の見学を行った。なお、来年度も広島工業高等学校との交流を継続することが約束された。



7. 学校間交流事業の支援

東広島市立三ツ城小学校と米国ノースカロライナ州エルムハースト小学校間で、テディベアプロジェクト（ぬいぐるみのクマを親善大使としてお互いに相手校に派遣。相手校からやってきたクマの立場・視点で子供たちが書いた日記を交換することにより、相手国の文化や習慣を学ぶもの。）が実施されるのに際して、広島大学グローバルパートナーシップスクールセンターがこれをコーディネートした。

【実施状況】

エルムハースト小学校のクマのピリー君は、2006年1月15日に三ツ城小学校に到着し、3月26日に帰国した。三ツ城小学校のクマのそら君は、2007年1月24日に学校を出発し3月12日に帰国した。

ピリー君、そら君はそれぞれ、訪問校において児童とともに学校生活を行い、夜は児童の家庭に順次ホームステイをした。ホームステイを受け入れた児童は、クマのお世話をするとともに、それぞれのクマの視点で日記をつけ、翌日一緒に登校しているⁱ。ピリー君は35名の児童(三ツ城小学校2006年度4年4組の全児童)の家庭、そら君は15名(エルムハースト小学校2006年度5年生の一部、内1名は滞在5年目の日本人)の児童の家庭にホームステイしている。

8. エスコート・プログラムの支援

(1) エスコートプロジェクトのフォローアップ

G P S C代表の小原友行は、3月下旬にボストン市を訪問した際に、シモンズ大学のグレイ・オーク先生、同大学ベティコート先生の案内で、昨年度のエスコートプロジェクトに3名の教師が参加されたフレデリック・ミドルスクールを2007年3月23日（金）に訪問した。そして「日本の現在と過去」というテーマの授業に参加し、生徒との交流を行った。また、学校長および教師に昨年度のエスコートプロジェクトのDVDを手渡した。その際に、グレイ・オーク先生、ベティコート先生と本年度のエスコートプロジェクトの計画の打ち合わせを行った。



(2) 2007年度エスコートプロジェクトの実施概要

本年度も、米国ボストン市からの教育関係者の広島市訪問があり、広島大学附属三原中学校9学年の生徒が昨年度開発したエスコートプロジェクトを実施した。

日時：2007年7月9日（月）

場所：広島平和記念公園(広島市中区中島町)および周辺施設

目的： 広島平和記念公園と公園内の慰霊碑および周辺施設をエスコートするにあたって、平和について考える機会とする。

アメリカのマサチューセッツ州立中高等学校の先生方をエスコートすることで、相手の立場に立ったコミュニケーションのとり方を体験する。他国の方と意見交流をすることを通して、両国の文化や考え方の相違に触れ、相手を受け入れ交流しようとする態度を育てる。



参加者：米国ボストン市の教育関係者 20 名（代表、シモンズ大学グレイ・オーク先生，同大学ベティコート先生）

広島大学附属三原中学校第 9 学年生徒 84 名，教員 7 名

内容：米国ボストン市の教育関係者との出会い（簡単な自己紹介）

グループに分かれての昼食

平和記念公園および周辺施設のエスコート実習

各グループでの交流会（座談会）

平和集会（平和の子の像），記念撮影

9. コンソーシアム

(1) 第2回西日本3大学コンソーシアム協議会

日時：2007年4月16日(月) 13:30 – 16:30

場所：大阪教育大学柏原キャンパス

協議内容：

語学研修への合同参加について

- ・大阪教育大学がUNCWで現在行っている「語学研修（3週間）+観察実習（1週間）」のプログラムへの合同参加の方法について話し合いを行った。

学生交流について

- ・アメリカ3大学との学生の派遣・受入の具体的手続きについて話し合いを行った。

今後の学术交流について

- ・国際GPへの申請について検討することとなった。

(2) 第3回西日本3大学コンソーシアム協議会

日時：2007年10月22日(月) 13:30 – 17:00

場所：大阪教育大学天王寺キャンパス

協議内容：

学生交流について

- ・2008年の学生派遣・受入の具体的手続きについて協議し，決定した。

今後の学术交流について

- ・国際GPへの申請について，引き続き検討することとなった。

10. 米国ボストン市でのGPSC活動の紹介

日時：2007年3月23日（金） 18：30～20：30

会場：ボストン市のシモン大学図書館

主催：米日財団

プレゼンター：小原友行（GPSC代表）

参加者：アジア研究に関心をもつ約25名の米国関係者

内容： 2006年度の広島大学附属三原中学校第9学年生によるエスコートプロジェクトおよび2006年度のGPSCによる「体験型海外教育実地研究」をパワーポイントとDVDで紹介
質疑

11. GPSC100名ネットワーク

この3年間で、GPSCの活動の趣旨に賛同し、グローバルマインドをもった人材の育成を図ろうとする意志もった人々から成るGPSC100名ネットワークを組織した。メンバーは、過去に米日財団からの助成を受けて広島大学が実施したプロジェクト「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発」や今回のプロジェクト活動に参加した人々であり、学校現場の教員、教職を目指す学生、大学教員など、主に教育関係者から構成されている。現在、100名以上のメンバーが登録されており、GPSCの活動の案内に利用されているが、将来的にはメンバー相互の交流ができるようなネットワークにしていきたいと考えている。

12. ウェブページの更新

本年度の主なGPSCホームページの更新内容は、昨年度の事業報告ならびに本年度の学校間交流国際フォーラムの案内の掲載であった。日本語ページともミラーサイトである英語ページについても、同様の更新を行った。

・本年度事業に対する評価

1. 第3回学校間交流国際フォーラムの参加者アンケート

・ 2. で報告した第3回学校間交流国際フォーラムの参加者に対して、フォーラム終了後、アンケートを実施した。そのアンケートの内容および集計結果を以下に示す。

【アンケート内容】 第1部実践発表の内容に対する満足度(5段階評価:とても満足～とても不満足), 第2部シンポジウムの内容に対する満足度(5段階評価:とても満足～とても不満足), フォーラムに対する感想・次回フォーラムで取り上げてほしいテーマ(自由記述)

【集計結果】

参加者 89 人中, 31 名からアンケートへの回答を得た(回収率 35%)

(1) 実践発表の内容に対する満足度

実践発表の内容に対する満足度の平均値は、5段階評価中 4.2 ポイントであった。

(2) シンポジウムの内容に対する満足度

シンポジウムの内容に対する満足度の平均値は、5段階評価中 4.3 ポイントであった。

(3) フォーラムに対する感想・次回フォーラムで取り上げてほしいテーマ

実践発表に対しては、「幼、小、高 それぞれの校種での取り組みの内容がよくわかる発表でよかったです。」「グローバルマインドを育てる為の幼児期からのカリキュラム作りありがとうございました。」など、年齢段階を追った各校種での取り組みを取り上げたことに対して肯定的な意見がみられた。また、シンポジウムに対しては、「人と人とのつながりを大切にしながら直面する問題を解決しようとする事を通してグローバルマインドが育まれると思いました。」「国際理解教育にとって英語は必要な条件だと考えていたが決してそうではなく、他者とのコミュニケーション又はコミュニケーションを通しての他者理解がねらいとされることであり外国のことだけではなくまさに隣に座っているひとのことに通じるものだと感じた。」「今回教員という立場で参加しました。私たち教員がいかにグローバルマインドを身につけるか、子どもがいかにグローバルマインドを身に付けさせるか考えさせられました。どの方の話を聞いてもシンポジウムの質問を聞いていても具体的な異文化衝突場面の中に大切なことがあることそれに向かい合い乗り越えなければならないときにグローバルマインドは身につけ高まるのだと気づきました。」など、グローバルマインドの育成について参加者が省察する感想が多く、シンポジウムが企画者のねらい通りに展開されたことが示された。次回フォーラムに関しては、今後も同じテーマで続けてほしいという意見が寄せられており、本フォーラムのみならず、GPSC の活動に対する期待が示された。

2. 体験型海外教育実地研究についての評価

体験型海外教育実地研究の評価については、本実地研究の報告(p.15～p.16)に示したとおりである。

3年間の事業に対する評価

1. GPSC 外部評価者による評価

「グローバル・パートナーシップ・スクール・センター3年間の評価」

GPSC 外部評価者・溝上 泰(前鳴門教育大学長)

(1) グローバル・パートナーシップ・スクール・センター3年目の活動

平成 17 年 4 月に創設された「広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター」(GPSC)も3年目をむかえ、活動は質量ともに深まり、順調に展開されていると感じる。本センターの本年度の活動で特筆すべきこととして、次の2点を指摘することができよう。

第1は、国際交流の成果である。昨年は広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センターが基になって、西日本の3大学(大阪教育大学、広島大学教育学部、鳴門教育大学)とノースカロライナ州の3大学(ノースカロライナ大学ウイilmington校、イーストカロライナ大学教育学部、ウェスタンカロライナ大学)が連携したコンソーシアムが締結されたが、本年度はそのネットワークが活かされて、6大学の代表が一同に会したシンポジウム「グローバルマインドをもつ教員養成のこれから - local から global へ」を企画、実施された。また、ウェスタンカロライナ大学からの留学生を受け入れるなど、まさにグローバル・パートナーシップが築かれつつある。

第2は、人材育成の成果である。2回目の「体験型海外教育実地研究」が本年度も広島大学大学院教育学研究科博士課程前期の集中講義として企画、実施された。今年度は、受講生も増え、昨年度の経験の上に、内容も一層充実してきている。また、事後の学習成果報告会を広島大学で公開開催するなど、本センターのねらいでもある、将来グローバル・パートナーシップを推進していく教員や、学校間の交流・連携を推進していくことのできるリーダーとなる人材の育成に向けての着実な取り組みとなってきた。

(2) グローバル・パートナーシップ・スクール・センターのこれからに向けて

グローバル・パートナーシップ・スクール・センターのこれからの取り組みとして、次の3点を期待したい。

第1は、「体験型海外教育実地研究」の教育的効果に関する国際比較をコンソーシアムを活用して行うことによって、その成果を日米で共有化していくことである。

第2は、米日財団の助成が終了しても、国際交流・国際協力を推進するリーダーの養成という目標の実現に向けて、日米両国の相互交流型のワークショップやセミナーを継続していくことである。

第3は、日本国内にグローバル・パートナーシップ・スクール・センターの人的ネットワークを形成していくことである。センターの活動が継続していくためにも、これまで広島大学のプロジェクトに参加・協力したメンバーを中心にしながら、活動を支えるネットワークの構築が求められよう。

2. 本年度事業の成果と課題

「3年間の成果と今後の展望」

センター長 小原 友行

(1) 3年間の成果

グローバル・パートナーシップ・スクール・センターの3年間の成果は、大きく次の3点である。

情報発信の成果

グローバル・パートナーシップ・スクール・センターのウェブページを立ち上げ、1993年度～

1995年度米日財団助成で「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」(代表 溝上泰) 1999年度～2002年度米日財団の助成で「グローバル・パートナーシップ・スクールプロジェクト」(代表 ドナルド・スペンス) 広島大学附属三原小学校・同中学校や広島大学附属東雲中学校におけるグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトによって締結された日米姉妹校の交流実績を掲載することができたこと。

人材育成の成果

アメリカ合衆国ノースカロライナ州で行う「体験型海外教育実地研究」を企画し、広島大学大学院教育学研究科博士課程前期の集中講義として実施できた。

また、広島大学附属三原小学校とウォールコート小学校・エルムファースト小学校、広島大学附属三原中学校とマーチンミドルスクール、広島大学附属東雲中学校とイクスプロ・リスミドルスクール、東広島市立三ツ城小学校とエルムファースト小学校とティビエアプロジェクトなどのグローバル・パートナーシップ・スクールの多様な学校間交流活動の支援、イーストカロライナ大学の教員志望学生を受け入れての体験型教育実地研究指導の支援などを通して、グローバル・シティズン育成の基礎づくり行うことができたことである。

ネットワーク再構築の成果

日本および米国におけるこれまでのプロジェクトのアセスメントとこれからの活動の企画会議の開催、これまでのプロジェクト参加者や国際交流に関心をもつ教員・留学生を集めた「学校間交流国際フォーラム」の開催、グローバル・リーダー養成のためのワークショップの開催などのグローバル・パートナーシップ・スクール・センター主催の行事を通して、またアメリカ合衆国各地のプロジェクトとの情報交換を通して、国内およびアメリカ合衆国との人的ネットワークを再度構築することができたことである。また、西日本の3大学(大阪教育大学、広島大学教育学部、鳴門教育大学)とノースカロライナ州の3大学(ノースカロライナ大学ウilmington校、イーストカロライナ大学教育学部、ウェスタンカロライナ大学)が連携したコンソーシアムを立ち上げることができたことである。さらに、米国側の多様な交流要請の窓口になることができたことである。

(2)将来の展望

グローバル・パートナーシップ・スクール・センターは、米日財団からの研究助成は本年度で完了するが、たとえ規模が縮小しても、今後も次の3点を中心に活動を展開していきたい。

情報発信のためのウェブページの更新

1)グローバル・パートナーシップ・スクール・センターが新しく開発した学校間交流プログラムやグローバル教材の掲載

2)資料のデータベース化

国際交流活動による人材育成

1)アメリカ側の教員や教員志望大学生の受け入れ(教育実地研究)

2)教員を目指す広島大学の大学院生(現職教員大学院生を含む)対象の海外体験型教育実地研究(集中講義)の継続実施

3)グローバル・パートナーシップ・スクールの発掘と締結

4)具体的な学校間交流活動の支援

教材やプログラムの開発のためのワークショップ

1)グローバル・リーダー養成のための学校間交流国際フォーラムの開催

2)具体的な学校間交流のためのプログラムや、グローバル教材・学習指導法の開発のためのワークショップ

3)姉妹校関係の締結・継続の方法論開発のためのワークショップ